

学校文化への適応

—入学直後の教師と子どもの談話の分析から—

清水 由紀

(お茶の水女子大学人間文化研究科)

【目的】

小学校に入学した児童は、属している文化の価値観を反映した学校文化を、教師の導きにより自分の中に取り込むようになる。本研究では、公的な集団場面として「朝の会」を取り上げ、そこで行われた教師と子どもの談話を分析することによって、教師が小学校新入学児の学校への適応をどのように導いているかをとらえる。

【方法】

時期 4月と7月に、それぞれ6回ずつ実施した。

調査対象 都内の国立大学附属小学校1年生の1学級の児童40名と担任教師1名。

手続き 教室の後ろにビデオカメラを3台設置し、朝の会とその前後の様子を録画した。また補助としてカセットテープレコーダーによる録音と観察者による記録も行った。

【結果と考察】

1.教師の発話が占める割合 朝の会における教師の発話が、全体の発話の中でどのくらいの割合を占めているのかを調べた。その結果、教師の発話は4月は全発話の約70%を占めていたが、7月には40%にまで減少し、代わって児童の発話の占める割合が高くなった ($\chi^2(3)=99.04, p \leq 0.01$)。よって教師の参加度は4月には高いが7月には低くなり、代わって児童の参加度が高くなったことが示された。

2.教師の発話の相手による分類 教師が①個人的に一对一で児童と話したのか、あるいは②児童個人に向かって話しているか、その発話がその他の児童全員にも聞かせる意図を持ったものであるのか、③児童全体に向かって話しているのか、の3つに分類した。4月・7月のどちらにおいても、②や③はそれぞれ40%~50%を占めていたが、①は6%のみだった。よって教師は入学当初から集団を意識した言葉かけを行っていることが示唆された。

3.教師の発話の機能による分類 朝の会において、教師の発話がどのような機能を果たしているかについて検討した結果、Figure1のような7つのカテゴリに分類できることが分かった。発話の機能(7) × 時期(2) の χ^2 検定を行った結果、それぞれ

の機能の占める割合は時期による変化が見られた ($\chi^2(6)=72.76, p \leq 0.01$)。残差分析の結果、「規則を理解させるもの」と「児童の発言の繰り返しかえし」が4月から7月にかけて減少し、かわって増加したものは「児童の発言に対するコメント・説明」「集団を意識させるもの」「確認の質問」であった。よって4月は規則の導入に重点を置き、まだ不慣れな児童の発言を繰り返すことで補っていたが、7月には児童の適応が進んだため児童の発言の内容に立ち入るようになり、さらに集団意識を児童に持たせるような言葉かけをするようになったことが示唆された。

4.朝の会の進行手順の指導内容 教師による朝の会の進行手順の導入の仕方を見るため、教師の発話の中で朝の会の進行手順に関するものを「代行」「指示」「補助」「指導なし」の4つの内容に分類した。指導内容(4) × 時期(2) の χ^2 検定を行った結果、指導内容の割合は時期によって変化した ($\chi^2(3)=59.33, p \leq 0.01$)。4月全体では「代行」と「指示」が約70%を占めていたが、詳しくビデオを分析すると、まず朝の会開始直後は「代行」が行われ、その後日を重ねるに従って「指示」「補助」「指導なし」の順に移り変わっていくことが観察された。よって児童の入学当初は、教師は最初は児童の代わりにやってみせることで示し、その後児童の適応の程度を見ながら、指示、補助という過程を経て、最終的には児童が自立的に行えるように、段階的に指導していることが示唆された。7月になると「指導なし」が約90%を占めるようになり、日直児童は自立的に朝の会を進行させることができるようになったことが示唆された。

